

平家物語と修羅能について

On The Tales of Heike and Shura-noh

三 谷 幸 子

平家物語を素材とした能は、二番目物の修羅能に最も多く、三番目物・四番目物・五番目物にも涉っているが、そのうち典拠を平家物語とする二番目物の修羅能・略修羅能について管見を述べたい。

一

能楽については、現在上懸りと言われている観世流・宝生流に対して、下懸りの金春流・金剛流・喜多流の五流があるが、現今において演能曲の最も多い観世流現行曲に拠ることにした。

能楽の種類については、世阿弥は花伝書の第二、物学條々の項で「女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事」に分類して説明を加えており、至道花書においては、二曲三體に分別して、

「當藝の稽古の條々、其風體おほしと云共、習道の入門は、二曲三體をすぐべからず。二曲と申は舞歌、三體と申は物まねの人體也。

平家物語と修羅能について

—中略—此外の風曲のしなじなは、みなこの二曲三體よりのづから出来る用風を、しぜんく〜に待つべし。かみまひ、閑全なるよそをひは、老體の用風よりいで、幽玄みやびたるふしかかりは、女體の用風よりいで、身動足踏の生曲は、軍體の用風よりいで、意中の景をのれと見風にあらはるべし。若、なをも藝力おろそかにて、此用風生ぜずとも、二曲三體だにきはまりたらば、上果の爲手にてはあるべし。此二曲三體を定位本風地體と名附。—後略—

とあり、能作書においては、
「三體作書條々。老・女・軍、三體也。—中略—はうか、是は軍體の末風、碎動の態風なり。じねんこじ、花月、男物ぐるひ、若は女物ぐるひなどにてもあれ、其能の風によりて、碎動の便風あるべし。—後略—」
と記されている。

また、一日の演能曲数については、習道書に次のように示している。

「申樂の番数の事、昔は四五番には過ぎず。今も神事勸進等には、信の能の申樂三番、狂言二番、巳上五番なり。近年貴所様にて仕る事は、殊の外に番数を盡して、七八番、十番など、貴命にて仕る事、私ならず。然れば、能の序破急の事、脇能は序なり、二番三番四番は破にて、事を盡して、五番目は急にてはて、序破急納まりて、遊樂成就の一會なるに、思はざるに、番數重なれば、序破急また改まりて、曲道も前後する風體なり」

これによって、脇能・二番・三番・四番・切能といった五番立の演能順が定められたことがわかる。しかし、この五番立が確立したのは、やはり、徳川時代で、江戸幕府が諸芸道の系統・組織の調査をするようになり、各流の責任者は芸道に関する資財目録と共に上演の曲目を「書上」として提出しなければならなかったので、上演曲目とその数の整理と共に五番立の分類も確立したと思われる。

観世流現行曲二百八番のうち、神歌を除いて二百七番を五番立によって分類すると次の通りである。

初番目物（脇能物）

神舞物・働物・築物・真の序の舞物・中の舞物・神築物・獅々舞物

二番目物（修羅物）

カケリ物・準カケリ物・中の舞物

三番目物（鬘物）

序の舞物・中の舞物・舞のない物

四番目物（雑能物）

狂乱物（狂物） 女物狂物・男物狂物

遊狂物（遊樂・遊狂物） 神築物・遊樂物・遊女物・執心遊樂物
執念物―執心・執念物

人情物―舞のない物

現在物―男舞物・切組物・準切能物

五番目物（切能物）

働物―害悪なき鬼神物・害悪の鬼神物・英雄の幽霊物・加護神

靈物・竜神物・畜類物・天狗物

早舞物―女物・中将物

特殊舞踊―舞踊が目的の物

祝言物―半能（原則的に）

以上であるが、この五種類を、神物・男物・女物・狂物・鬼畜物の略称で呼ぶ場合があるが、これは、あくまでも俗称である。初番目物の「脇能」は、能の中でも本格的な定型を守っているものである。脇能物は後ジテで神体があらわれ、厳肅なうちにも、めでたく晴れやかさをもった能である。脇能の名称は、翁の脇と云う意味でワキが初めに次第の囃子で登場して謡うのが、原則になっているからである。

「修羅物」は、文字通り修羅道の苦しみを見せるもので、主人公が殆ど源平の名将で名を知られた武士である。「巴」のように女武者の例外はあるが、とにかく、そうした武将たちは、戦場において殺生の刃をとって戦った以上は、仏法の最も戒めとする重罪を犯したのであるから、ことごとく修羅道に落ちねばならぬ。修羅道とは仏教用語で、迷界の人間が今生においてつくった業果によって、来世に到る六道、すなわち、地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人間道・天上道の

中の修羅道で、そこに墮ちた者は、仏罰として皆修羅の苦しみを受けねばならぬのである。そこから逃がれる道は、ただ一つ弥陀の本願を頼みまいらせて救われるよりほかはないのである。

「鬘物」は、源氏物語・伊勢物語などを素材とした王朝女性が主人公で、原則として優雅な序の舞を舞ふものである。鬘物の名称は、男性が女物を演ずるために用いる鬘からの名称である。すなわち、女性を主人公とする能と云うことである。

「四番目物」は、脇能物・修羅物・鬘物・切能物の範囲に入らない能の総称であるから、雑能物または雑物とも呼ばれるが、演能番組の順位から四番目物と呼ばれることが多い。

「切能」は、番組の大切おとぎにおかれて、演能の最後を飾る短的で壮快であり、テンポの早いものが多い。内容的に言えば、鬼畜天狗類は働はたらを見せるものであり、早舞物は貴人の現世への追憶的舞物であり、特殊舞踊は、猩々乱・石橋の獅子舞などのように妖精の祝賀的表現である。

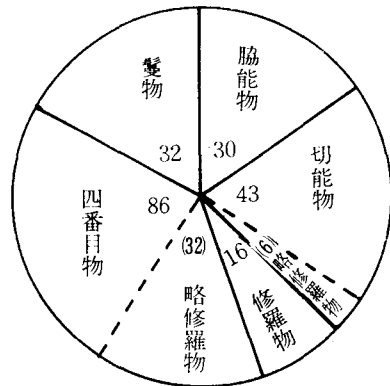
とにかく、一日の演能の終りを、最も高らかに賑々しく、しかも、能楽の観賞にふさわしい重厚さを失わないで演ぜられなければならない能である。

そこで、以上述べた五番立の呼称を「脇能物」「修羅物」「鬘物」「四番目物」「切能」として観世流現行曲を分類した。

次に示す表は、二百七番の曲数を五番立によって分類したものである。

脇能物 三十曲

平家物語と修羅能について



されているものが三十二曲有り、切能物のうちで六曲が略修羅物である。すなわち、事実上修羅物として演ずることが出来る曲数は五十四曲となる。右の表において演能順によらなかったのは、この曲数を示すためである。

なお謡本（観世流・大成版）に、四・五番と記されている十七曲については、曲趣などから判断し、いづれかに定めて分類した。

四番目物としたのは十一曲である。

- 「安宅」あたか 「自然居士」じねんこじ 「禪師曾我」ぜんじそが 「七騎落」しちきおち 「正尊」しょうぞん 「大仏供養」だいがぶくじやう
- 「忠信」たけのぶ 「錦戸」にしきと 「鶴」つる 「盛久」もりひさ

一番目物とした曲は六曲である。

- 「皇帝」こうてい 「昭君」しょうくん 「須磨源氏」すまげんじ 「殺生石」せつしようせき 「谷行」たにこう 「羅生門」らしようもん

修羅物 十六曲

鬘物 三十二曲

四番目物 八十六曲

(内略修羅物三十二曲)

切能物 四十三曲

(内略修羅物六曲)

修羅物は、現行曲二百七番のうち十六曲であるが、四番目物のうち、略修羅物として修羅物同様に二番目に演ずることを許

修羅物（略修羅物を含む）五十四曲のうち二十七曲が平家物語に素材を得ている。平家物語の中に異本平家物語と言われている源平盛衰記をも含めた。二十六曲の曲名・後ジテ・出典を次に表示する。曲名・後ジテは、観世流謡本・大成版により、出典の平家物語は、富倉徳次郎著「平家物語全注釈」（角川書店刊）によった。曲目の下欄の（ ）は別名である。出典「平家物語」を紙面の都合上「平家」と略した。曲名は五十音順とした。

曲名	後ジテ	出典
安宅（安宅判官）	武蔵坊弁慶	「源平盛衰記」卅六
敦盛（草刈敦盛）	平 敦盛	「平家」卷九・敦盛の最後
碇潜	平 知盛	「平家」卷十一・先帝御入水 ・能登殿最後・内侍所都入
生田敦盛（生田）	平 敦盛	「平家」卷九・敦盛最後
旅（旅梅）	梶原源太景季	「源平盛衰記」卷卅六・一谷 城構同卷卅七・景時秀句
景清（盲目景晴）	悪七兵衛景清	「平家」卷十一・弓流
兼平	今井兼平	「平家」卷九・河原合戦・木曾最後
木曾（木曾願書・殖生）	覚 明	「平家」卷七・木曾願書

清経	平 清経	「平家」卷八・太宰府落 「源平盛衰記」卷卅三・清経入海
小督（仲国）	源 仲国	「平家」卷六・小督
実盛（篠原・篠原）	斎藤别当実盛	「平家」卷七・実盛最後
七騎落（七騎落忍）	土肥実平	「源平盛衰記」卷廿一・兵衛 佐殿臥木に隠るる・卷廿二・ 佐殿三浦に遭会ふ
俊寛（鬼界ヶ島・俊寛）	俊 寛	「平家」卷三・赦文
俊成忠度（五条忠度）	平 忠度	「平家」卷七・忠度都落
正尊（昌俊・土佐坊）	土佐坊正尊	「平家」卷十二・土佐房誅
忠信（空腹・吉野忠信）	佐藤忠信	「源平盛衰記」義経吉野都落
忠度（短冊忠度・薩摩守）	薩摩守忠度	「平家」卷九・忠度都落・薩摩守最後
経正	平 経正	「平家」卷七・経正都落
知章	平 知章	「平家」卷九・浜軍
巴	巴 御前	「平家」卷九・木曾最後
鶴	鶴	「平家」卷四・鶴
通盛	平 通盛	「平家」卷九・老馬・坂落・小宰相
盛久	平 盛久	長門本「平家」卷廿・主馬八郎左衛門尉盛久

屋島（八島・八島） 判官義経 源 義経 「平家」卷十一・屋島軍・弓

頼政（源三位・宇治頼政） 源三位頼政 「平家」源氏揃・大衆揃・橋

合戦・宮最後

羅生門（綱） 鬼 神 「平家」卷十一・剣

以上であるが、参考までに次の四点を書き加えておきたい。

一、鬘物で平家物語を素材としているもの（四曲）

「大原御幸」 「千手」 「仏原」 「熊野」

二、平家物語を除く軍記物で略修羅物とされている曲、義経記・曾我

物語・太平記などに素材を得ているもの（十一曲）

「烏帽子折」 「楠露」 「熊坂」 「項羽」 「禪師曾我」 「朝長」

「仲光」 「錦戸」 「橋弁慶」 「夜討曾我」 「弱法師」

三、修羅物・略修羅物でありながら軍記物に取材せず、説話・歴史物

語・和歌・縁起もの等に素材を得ているもの（十七曲）

「芦刈」 「通小町」 「花月」 「高野物狂」 「自然居士」 「春采」

「善知鳥」 「卒都婆小町」 「田村」 「大仏供養」 「土車」 「錦木」

「鉢木」 「船橋」 「放下僧」 「松虫」 「女郎花」

四、切能の中、平家物語をはじめ軍記物に取材しているもの

「玄象」 「船弁慶」 「碇潜」 「羅生門」

三

修羅能のことを能楽大成者である世阿弥元清は「花伝書」の中の物学条々の項で次のように記している。（世阿弥十六部集・上・能勢朝次著・岩波書店刊による。）本文は吉田東伍博士が安田家蔵本を翻刻したもので、傍訓漢字・平仮名は能勢朝次博士の責任になるものである。

これ又一體の能なり。善爲よくすれども、をもしろき所まれなり。さのみにはずまじきなり。ただし、源平などの名のある人の事を、花鳥風月につくりよせて、能よければ、何よりもまたおもしろし。是、こと花やかなる所ありたし。これといなるしゆらくるひ、や、もすれば、鬼のふるまひになるなり。又は、舞の手にもなるなり。それをもくせまひがゝりならば、すこし舞がゝりの手づかひよろしかるべし。弓箭（胡籥）なぐひをたづさへて、うち物をもて（打）厳とす。そのもち様、使（使）様、能くうかゞひて、そのほんいをはたらくべし。相構（あひかまへ）て、鬼のはたらき、又舞の手になる所を用心すべし。

以上であるが、修羅は、世阿弥の物真似の基本体（軍体・老体・女体）である三体のうちの軍体である。「よくすれどもをもしろき所まれなり」と述べているように、おもしろき所まれなものを、源平などの名のある武将のことを花鳥風月につくりよせて「能よければ何よりもおもしろし」として、修羅能を現行曲のように面白くしたのは花鳥風月に作りよせたからであると世阿弥は言っている。また、修羅能の

面白さは「相構へて鬼のはたらき、又舞の手になる所を用心すべし」と記してあるように、五番目物の鬼畜のように「鬪」をしてはならず、舞の手のように優にやさしくなつてはならぬのである。したがって、先学の方達が述べられているように、今日のように、おもしろき修羅能を作りあげたのは世阿弥であることがうかがえるのである。

略修羅物物が、神事物には皆無で、鬪物には三十二曲のうち四曲のみであり、四番目物八十二曲のうち三十二曲も含まれており、鬼畜物の中に五曲含まれているのも、素材によることは云うまでもないが、こうした世阿弥の本意がうかがえるのである。

また、世阿弥の著「花鏡」の「序破急の事」にも、修羅物について次のように述べられている。前後を省略して二番目物についての部分のみ転載する。(世阿弥十六部集上・能勢朝次著・岩波書店刊による。)

二番目 猿 楽 脇 猿 楽 變 風體
 一本 説 正 強々 閑雅
 いの、ほんぜつたゞしく、つよぐとしたらんが、しとやかならん
 風體
 ふうていなるべし。是は、わきのさるがくにかはりたるふぜいなれ
 共、いまだ、さのみにこまかになくて、手をいたくくたく時分にて
 未 細 甚 碎
 なければ、是もいまだ序の名残の風體也。

と述べている。すなわち修羅物は、「ほんぜつたゞしく、つよぐよとしたらんが、しとやかならんふうていなるべし」としている。能勢朝次博士は、「本説正しく」は「直なる本説」と同義語で、本説とは、修羅能の場合は、その曲の素材となっている軍記物語をさし、典

典の出典の筋をゆがめず、修羅物らしく、軍体として強々とせねばならぬが、鬼畜ではないのであるから、やはり、しとやかならん風體で、人間として、もののはれを解する武将として、表現すべきであるとしている。

四番目物以外は、能は大抵の場合、複式夢幻能として、前ジテが登場して昔の思い出を語つてのち、かき消すように中入りとなる。ふたたびシテが登場する折は、昔ながらの軍体の姿であらわれ、主人公自身が、修羅のさまを語り、歎き悲しむのである。すなわち、第三者が客観的に過ぎ去った日の思い出を語るのでは迫力がなく、能を演ずる者も、観客も、成仏出来ない主人公の苦しみを自分のものとする事が出来ない。しかし、源平の武将が甲冑に身をかためてあらわれ、昔の修羅のさまを武将自身が演ずるのであるから、能は魅力あるものとなり、そこで、「本説正しく」平家物語が、そのままの詞章で用いられてきたのである。能における「幽霊」とは、そうして現実感をもった迫力のある昔語りの手法としては、まことにすばらしい着眼であると思う。

しかし、それは、あくまでも序の名残りの風體で、雅趣を持つ人間であり、しかも、武士の強々としたものも持ち合わせておらねばならぬ。「敦盛」のあわれさと雄々しき若武者振り、「忠度」にみる和歌の風雅と、右の肘を肩のもとからうち落され、遂に岡部六弥太に首を討ち取られる勇武のさま、修羅能のうち、ただ一人の女性として登場する巴御前のあっぱれ女武者としての奮闘と、女性故に義仲と共に死を選ぶことを許されず、木曾殿の最後を見とゞけて生きねばならぬ人間の業のあわれさ、執念と仏法による救い、風雅と修羅などまことに

能の持つ深い味わいがここに存することを強く思うのである。

また、同じく世阿弥の秘伝書で、能楽の書き方について、注意すべき重要な点を書きのこした「能作書」(世阿弥六十一歳の折、次男元能に与えた伝書)の三體作書條々の項を能勢朝次博士の世阿弥十六部集によって転載する。

一、軍體の能姿アケタイのうすがた、假令ケリヨカ、源平の名しやうの人體の本説ほんせつならば、

ことにく平家の物がたりのままに書べし。是又、五段のほどら入變い、音曲の長短をはからふべし。又、いりかはりて出る事あらば、後のきわに、曲舞くせまひなどあるべし。しからば、破か急へかゝるべし。

かやうなる能は、六段などにもなるべし。又、いりかはらねば、四段なるものもあり。能によるべし。はじめのきわをひきよせて、み

じかくと書べし。軍體の風姿、本せつ説によるべきほどに、書やう程のかゝり、一べんとさだまるべからず。音曲などもみじかくとか

きて、急をば、しゆらがりのはやしへ入べし。人體によりて、修羅懸怒善いかりてよかるべきもあるべし。けなげかるふしかゝりにて、もみ

くくとあるべし。軍體の出物ぶつもの、定めて名のりこゑあるべし。心得て書すべし。

ここでは、修羅能の作書について注意を与えている。「例へば、源平の名將の人體の本説ならば、殊に殊に平家の物語のままに書くべし」とは、内容や詞章を平家物語のままに書くように、典拠出典を大切にせよと注意をしているのである。

修羅物の能の眼目は後ジテにある。前ジテは主人公の化身で、尉や里人として登場し、ワキとの問答のうちに次第にシテの昔語りとなつて、その素性を明かさねばならなくなるのであるが、そこで、中入りと言う手法をつかつて、複式夢幻能として後ジテの凛々しい武將の出場により、観客の耳目を驚かし、また、幕のない立体的なエプロン舞台を巧く生かして、尉や里人の姿から、中入り後は一変して華麗な武者装束で、観客の中の舞台で、傷ましい修羅の巷での死を飾る修羅がかりの早節となるのである。

したがって、その本領である後ジテの部分を多くするために、前ジテは短かくと書き、後ジテの修羅のさまは、けなげなる節がかりにて、もみくとあつて平家物語の詞章が用いられねばならぬのである。

それにつけても、世阿弥は何故に、「殊にく平家の語りのままに書くべし」と、平家物語から離脱することをそれほどまでに殊にく戒めたのであろうか。世阿弥の生きた時代は、平曲が大衆に愛され、寺社の催物などによって、全国に平家物語が琵琶法師によって伝えられていたからであらうか。

世阿弥の生誕に対する研究は表章氏・香西精氏・松田存氏・藪田嘉一郎氏など多くの先学の方達によって、資料の発見と研究がなされてきたが、世阿弥の生きた千三百年代は、平曲が最も世の人々に賞玩された時代で、徒然草の文献による信濃前司行長と共にその名を伝えられている盲琵琶法師生仏を平曲の開祖として、平曲界の大成者と目されているが、後村上天皇の御代に、彼の没後約百年間の平曲史上の最

盛時の礎を築いている。すなわち後花園天皇・後土御門天皇の時代は平曲の極世期で、広く大衆に向って、平曲を流布し、また、大衆も、天下をゆるがした源平の戦いに強い関心をよせ、特に平家物語については、平曲によって非常にくわしく内容を知っており、他に娯楽として少ない時代に、あの哀調をもった琵琶の音色と共に、心のカメラにやきついている源平の武将たちのことが、もしも、能によって歪められてしまったとしたならば、人々はおそらく猿楽能に魅力を持たなかったであろうと思う。自分の心の中に残り、時代と共に美化されてゆく源平の名将を、視聴覚に訴えて捉えることの出来る楽劇「能」によって目前に見ることが出来たからこそ、能は武士階級は勿論大衆にも受け入れられたのである。

いうまでもなく、「能」が猿楽座として大衆の中から生まれ、今日のように大衆に受け入れられるまでには、長い時間を要している。歴代の将軍は能楽者のよき後援者であり、庇護者であったが、その能を今日まで存続させている生命力は、能役者がどんな処においても、大衆から離れ、大衆を忘れた芸能に安んじてはいなかったからであろう。

風姿花伝の第五奥義において「この芸とは、衆人愛敬をもて、一座建立の寿福とせり」といい、「貴所・宮寺・田舎・遠國・諸社の祭祀にいたるまで、押し並べて、そしりを得ざらんを、寿福の達人の為手とは申すべきか」と言ひ、また「そもそも、芸能とは、諸人の心を和らげて、上下の感を成さんこと、寿福増長の基、退齡延年の法なるべし」と、階級的なものを超えて、芸能が一般庶民の人々に尊重されるべきだという自覚を忘れずに精進することに、生命をかけて「芸」を

磨いたからこそ今日まで長い生命力を保つことが出来たのである。このことを、永積安明氏も「観世」「昭45年8月号」において、「『平家物語』のイメージからはずれた語り方によっては、とうてい享受者をとらえることができず、あえてこれを無視すれば、能芸存立の基礎としての「衆人愛敬」による「寿福増長」を犠牲にするほかなかったであろうことは、これも指摘されているとおりでである」と記されておられる。

四

能勢朝次博士の申された「『平家のままに書く』と言うことは、内容や詞章は、能ふ限り平家物語のままに書くと言う意味で、説話の進行までも、平家物語の通りに進めよと言う意味は含まれて居ないものと考ふべきである。」との意見は、能を考察する上において、心すべき御意見である。

それでは、詞章は能う限り平家物語のままに書きながら、平家物語ではない「能」という芸術のあるべき姿において、どのような観点から、素材である平家物語にスポットを当てているのであろうか。

修羅物に取りあげられている平家物語の中の武将たちは、平氏の公達、敦盛・清経・忠度・経正・知章・通盛・知盛などや、老武者ながらあっぱれな戦死を遂げた実盛などがあり、源氏の武将たちでは、源義経・武蔵坊弁慶・悪七兵衛景清・源三位頼政などがあるが、ここに

は、天下を掌の中におさめ得たほどの英雄平清盛については、一曲も見うけられない。

保元・平治の乱の後、清盛は殿上人としてだけでなく、政界の有力者として、ついに摂政関白太政大臣にまで昇進し、安徳天皇の外祖父として名実共に天下の実権を握ることが出来た。

平家物語・巻一の「我身栄花」にもあるように、

我身の栄花を極むるのみならず、一門ともに繁昌し、嫡子重盛、内大臣左大将、次男宗盛、中納言右大将、三男知盛、三位中将、嫡孫維盛、四位少将、すべて一門の公卿十六人、殿上人三十余人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十余人なり。世には又人なくぞ見えられける。―中略― 日本秋津島は纒むすかに六十六箇国、平家知行の国三十余箇国、既に半国にこえたり。その外庄園田畠いくらといふ数を知らず。綺羅充滿して堂上の如し。軒騎群集して門前市をなす―後略―

これほどまでに、立身出世をし、天下を我がものと成し得た清盛こそ、衆人の最も興味ある存在であったであらうし、能の素材としては充分過ぎるものであると思うのであるが、滅びゆく平家の公達は描かれても、その柱と頼む平清盛の姿を能の中にみることが出来ない。この事については、金井清光著「能の研究」(桜楓社刊)では、

かれこそ修羅道におち、不断の苦患を痛烈に受ける人物として、修羅の人物として、修羅物の主人公にはまさきに取りあげられなければならぬ。しかし世阿は清盛をとりあげなかった。それは清盛が戦場で死んだのではないことに一因がある。また一つには清盛

があまりに偉大な人物でありすぎたため、能作の対象にならなかったということもあろう。あるいは、清盛のような政治家をとりあげることが、世阿の能を後援している足利將軍に対し遠慮しなければならぬ事情もあったかも知れない。しかし、木曾義仲を主人公とする修羅物もない―後略

と述べられている。清盛は東洋人特有の悲劇の主人公として同情に値する人物の範疇に入らなかつたと思われる。

源義経は取りあげられているが、彼は、平家滅亡に対して殊勲の手柄を立てながら兄頼朝にさえ受け入れられなかつた悲運の武将であつた。前述の平家の公達も、父清盛の期待を裏切り、公卿的優雅さ故にあはれにも源氏の鍛えられた軍勢の力のまゝに脆くも倒れていった弱き公達たちである。「敦盛」にしても、平家物語「敦盛最後」の段にあるように、

招かれて取つて歸し、渚に打ち上がらんとし給ふ処に、熊谷打ちぎはにて押し双べ、ひつ組んでどうと落つ。取つて押さへて頸をかんと内甲を押し仰けて見ければ、年の齡十六七ばかんなるが、薄化粧して金黒なり。わが子の小次郎が齡にて容顔誠に美麗なりければ、何くに刀を立つべしとも覺えず

とあるように、十六七歳の公達の命は、渚にはかなくも散つたのである。平重盛の嫡男維盛として平家物語巻十「入水」に記されているように

三位の中將維盛、法名淨円、生年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智の沖にて入水す

とあるように平清盛の直系の孫でありながら廿七歳の若さで、都に残した愛しい妻子に深く心を残しつつ自らの命を絶っている。平家一門を担うべき維盛の死を見とゞけた唯一一人の人、滝口入道の発心の動機は余りにも有名であるが、わが子と同じ年令の敦盛の若き命を武士故に散らさねばならなかった熊谷次郎直実の人の親としての心情は、ついに滝口入道と同じ仏道修行の身となって、大道心を求めることによって救われるのである。

武蔵守知章は新中納言知盛の子息で生年十六歳、一の谷の敗戦で磯辺に逃げ抜けて、沖なる御座船を追おうとしたが、これまた、敦盛と同じく源氏の兵共に追われて、主上を守護し奉らねばならぬ父知盛を助け、知章は監物太郎と共に、これもまた十六歳という余りに傷ましい若さで討死した。現在、平通盛碑と並んで神戸の地に眠っている。

最愛の人心宰相と添い遂げることなく、若き通盛は、真向ちやうと打ち返す太刀にて敵と刺し違へて共に修羅道の苦をうけ、またも、平家の公達は清盛の願いもむなしく哀れにも散ってゆくのである。小宰相はこれを聞き、彼女もまた、「あかで別れし妹背のなからひ、必ず一つ蓮に迎へさせ給へ」と後を追うて南無と唱うる声と共に海に沈まれた。

また、清盛の末弟薩摩守忠度は、平家物語、忠度都落・薩摩守最後に見られるように、ただ一騎として返し、「落人帰りきたり」と俊成卿の家人が騒ぐなかを、日頃詠みおいた歌百首書きあつめられた巻物を鐙のひきあわせより取り出して藤原俊成卿に奉った。その後勇武にすぐれた忠度も右腕を切られながらも戦い、ついに岡部六弥太に討たれ果てる。やがて世しずまって千載集を撰した折、勅勤の人故に読

人知らずとして

さざなみや志賀の都は荒れにしをむかしながらの山ざくらかな

の歌を載せられた。平家物語では「其身朝敵となりにし上は、子細にをよばずといひながら、うらめしき事共也」と結んでいるが、能では「なになかくの千載集の。歌の品には入りたれども。勅勤の身の悲しさは。読人知らずと書かれし事。妄執の中の第一なり」として、能の前段の「行き暮れて……」の歌と、後段の読み人知らずとなった怨みを取りあげて、陰惨な戦いの中に優雅の情趣を浮彫りにしている。

若者や、中年の忠度だけでなく、老武者「実盛」の中にも、人間として深い哀愁をおぼえるのである。能では実盛の最後を、実盛みずから亡霊となって後ジテの語りで次のように述べている。

実盛の亡霊「さても篠原の合戦敗れしかば、源氏の方に手塚の太郎光盛、木曾殿の御前に参りて申すやう、光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大将かと思れば続く勢もなし、また侍かと思へば錦の直垂を著たり。名のれくと責むれども、終に名のらず。声は坂東声にて候と申す。木曾殿「あっぱれ長井の斎藤別当実盛にてやあらん。然らば、鬚鬚の白髪たるべきが黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらん」とて召されしかば、樋口参り、ただ一目見て涙をはらくと流いて、

「あな無斬やな。斎藤別当にて候ひけるぞや。実盛常に申ししは、六十に余つて戦をせば、若殿原と争ひて先を駆けんも大人気なし。又老武者とて人々に、侮られんも口惜しかるべし。鬚鬚を墨に染め、若やぎ討死すべき由常々申し候ひしが、真に染めて候。洗はせ

て御覽候へ」と申しもあへず首を持ち、中略、髪を洗ひて見れば、墨は流れ落ちて元の白髪となりけり。げに名を惜しむ弓取は誰も斯くこそあるべけれや。あら優しやとて感涙をぞ流しける。

平家物語巻七「実盛最後」の章と殆ど同文で書かれており、「朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野のすすき形見とぞ見る」と詠んだ西行法師ならずとも、能の観客である武將達は、平家物語を、そして実盛を他人ごとならずわが身に感じ、感涙を流したことであろう。実盛の「首洗池」と称せられるものが片山津温泉の近くに残っている。蒲が密生した水溜りにすぎないが、今は掃除が行届いていない。うであるが、十数年前に訪れた折は、いかにもいにしへの旧蹟らしくあわれに荒れ果てて懐怜さがあつた。

みずからの手で弓矢をとり、長い戦いを体験した観客の武士達は舞台で演ぜられる修羅物の能を観る時、過去において修羅の巷を駆けめぐり、阿鼻叫喚の中を命をかけて戦った非情の世界に想いを馳せ、演能の中に自分を見出して、惜しめない喝采を送ったに違いない。

それは、たゞ勇ましい武士としてだけでなく、殺戮を敢えてしなければならなかった者の、人間としての心の傷みをかみしめることであつたのではなからうか。

要するに、能に描かれた軍体ものは、平家物語に描かれた武將よりも、優雅であり、人間味豊かで、哀愁に満ちたものである。観客の心の中に常に隠し持っている人間としての弱さや、苦患を、そして、歴史物語や軍記物語などの底を流れる人間の執念を表にとり出して見せている。そうした悲劇が目前に描き出され演じ出され、観客の心を捉え

る時、能という芸術は、人間のものとして生命を持つことが出来るのである。花伝書奥儀の中で、「命には限りあり、能には果てあるべからず」と述べているが、芸術が真にきびしく、また、個人の生命を超えて、永遠に存続し得る価値のあるものとするべく限らない努力を促した世阿弥の芸術者としての心を知ることが出来るのである。

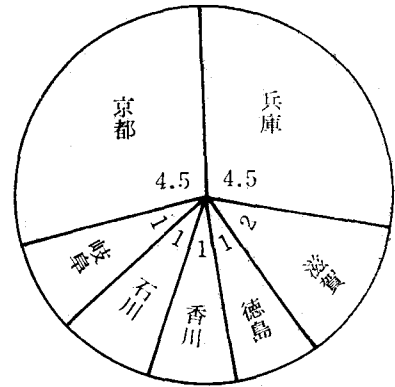
五

平家物語および、能・謡曲の名所旧蹟については、多くの先学の方達によって踏査されているので、それ等を参考にして、修羅物のみについて表示した。名所・旧蹟はシテを中心に主要場面に限った。

名所・旧蹟が二箇所にあつた場合は、国名を異にするものに限り、二箇所記した。ただし、その曲には※印をつけ、合計は半分とした。

まず、修羅物十五曲について府県別に分類してみた。修羅物十六曲のうち「田村」のみが、平家物語を素材としていないので、修羅物であるが省いた。左に府県別にして曲名を記した。

- 兵庫県 「敦盛」※「生田敦盛」 「籠」 「忠度」 「知章」
- 京都府・市 「俊成忠度」 「田村」 「経正」※「生田敦盛」
- 滋賀県 「頼政」
- 徳島県 「兼平」 「巴」
- 香川県 「通盛」
- 「屋島」

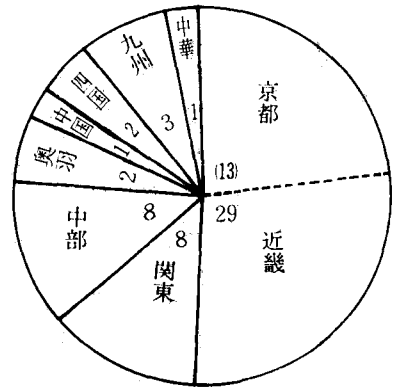


石川県 「実盛」
 岐阜県 「朝長」
 上の表を概観してみると、十六曲の中、近畿地方に十一曲存在している。これは、源平の戦場となった京都や兵庫にゆかりの地があるのは当然であろう。また、修羅能に略修羅能を加えた五十四曲の名所旧蹟を分類

してみると、やはり、近畿地方が圧倒的で、五十四曲のうち二十九曲あり、半数を上回っている。便宜上京都は特に多いので点線をつけて示した。関東・中部がこれに次ぐのは源氏に關係があるからであろう。

〔近畿地方〕

- 兵庫県 「敦盛」 「藤」 「忠度」 「知章」 「仲光」 ※ 「生田敦盛」 「鶴」
- 大阪府 「芦刈」 「楠露」 「松虫」 「弱法師」
- 奈良県 「忠信」 「大仏供養」
- 滋賀県 「兼平」 「巴」 ※ 「自然居士」 ※ 「烏帽子折」
- 和歌山県 ※ 「高野物狂」
- 京都府 「花月」 「通小町」 「小督」 ※ 「自然居士」 「俊成忠度」 「正尊」 「卒都婆小町」 「田村」 「経正」 ※ 「橋弁慶」 ※ 「盛久」 ※ 「生田敦盛」 「羅生門」 「女郎花」 「頼政」



- 〔関東地方〕
 「七騎落」 「春栄」 「禪師曾我」 「鉢木」 「放下僧」 「船橋」 ※ 「烏帽子折」 ※ 「高野物狂」 ※ 「盛久」
- 〔中部地方〕
 「善知鳥」 「木曾」 「能坂」 「実盛」 「土車」 「朝長」 「夜討曾我」 「安宅」

- 〔奥羽地方〕
 「錦木」 「錦戸」
- 〔中国地方〕
 「礎潜」
- 〔四国地方〕
 「通盛」 「屋島」
- 〔九州地方〕
 「景清」 「清経」 「俊寛」
- 〔中華人民共和国〕
 「項羽」

昭和四十八年九月十一日

〔本学国文学・専任講師〕

文献抄

単行本

謡曲大観 七巻	佐成謙太郎	明治書院	昭5~6
註解 謡曲全集・六巻	野上豊一郎	中央公論社	昭10~11
世阿弥十六部集評釈・上下	能勢 朝次	岩波書店	昭15・8
平家物語の研究	佐々木八郎	早稲田大学出版部	昭23・5
能・謡名所旧跡	栗林 貞一	松書店	昭25・8
続 能・謡名所旧跡	栗林 貞一	松書店	昭29・4
平家物語	栗林 貞一	三省堂	昭35・3
中世的なものとその展界	西尾 実	岩波書店	昭36・2
謡曲・狂言	富倉徳次郎	三省堂	昭36・6
平家物語全注釈・四巻	富倉徳次郎	角川書店	昭41~44
謡曲文学	里井 陸郎	源原書店	昭41・8
中世芸文の研究	筑土 鈴寛	有精堂	昭41・12
謡曲のふる里	木本 誠二	鹿島出版社	昭43・9
能の研究	金井 清光	桜楓社	昭44・10
能に生きる歴史群像	権藤 芳一	淡交社	昭74・2
世阿弥と能の探究	松田 存	新読書社	昭48・3
雑誌・紀要			
修羅物に現れし武士	高橋 義雄	能楽画報	大正4・1
世阿弥の修羅物観	斎藤 香村	能楽画報	大正4・1
平曲と謡曲との交渉	成瀬 一三	歴史と国文学	昭5・12
謡曲平家ものの成立史観	三品 頼直	月刊日本文学	昭6・6
修羅物の研究	鈴木 暢幸	国語教育	昭13・11
謡曲修羅物の構想と季感	安富常次郎	五十嵐力博士記念論文集・日本古典新放	昭19・10

平家物語と修羅能について

平家物語の謡曲

平家物語の謡曲	佐々木八郎	平家物語の研究下所収	昭24・1
世阿弥の典拠とした平家物語	荒木 良雄	甲南大学文学会論集	昭29・2
世阿弥と修羅能	戸井田道三	文学	昭29・9
平家物語の創出・流動・没落を中心として	谷 宏	文学	昭29・9
―修羅と軍体を中心として―			
平家・謡曲・近松の詞章における漢詩文	佐成謙太郎	解釈と鑑賞	昭31・7
謡曲の名所旧蹟	田中重太郎	国文学	昭31・9
平家物語と謡曲	田中 允	解釈と鑑賞	昭32・9
平家物語能楽の怨霊	村田 昇	山口教育学部研究論集第七巻	昭32・
世阿弥と平家物語	富倉徳次郎	観 世	昭39・8
修羅能から修羅物へ	金井 清光	鳥取大学文学部研究報告	昭39・12
平家物語と謡曲	浜坂 清美	女子大国文学	昭41・3
平家物語と能	里井 陸男	同志社国文学	昭41・3
平家物語と謡曲との関連性	久保 素子	東洋大学短期大学論集国語篇	昭43・3
―木曾義仲について―	永積 安明	観 世	昭45・8
―世阿弥の忠度をめぐって―			